

体昇華の衣装観を象徴しながら，中世衣装美形成の重要な因子を内蔵していることが思惟される。

C-15 ビザンチン様式美の服飾史的意義

九州学園福岡女短大 塩塚 瑞枝

1. 1000年に及ぶビザンチン文化の内に育くまれた服装美について多くの服装史は僅かのページで簡単な説明を加えているに過ぎない。ビザンチンは地理的条件から見ても欧州に最も近接したオリエントに位置した東ローマ帝国の首都であり，古典文化を受け継ぎ，思想的にはキリスト教を国是として成立している。このような背景の上に成立したビザンチン服飾は明らかに過少評価されていると考えられ，欧州中世に与えた服飾史的影響はより重視されるべき筈のものである。本研究はその重要性を指摘する序論的意義をもつものであって，特に，9C以後の服飾美を中心として考察したいと思う。

2. 美術的資料を中心とする様式史的展開

3. 欧州ではローマ，抬頭するゲルマン，この2つの異なった文化的核があり，次第に交叉する。ローマ文化及び服飾はキリスト教化により変質し，ゲルマンは固有の文化的地盤の上にローマ的なものを吸収しようとしている。ビザンチンは古典文化の上にキリスト教思想，東方的思念を加え，独自の文化的展開を示し，ここに強力な大きな核を形成する。中世はこの三つ核を中心として服飾史的展開を示すがその中心となるものはビザンチン服飾造型であって，独自の荘麗な材質使用，造型意識は表衣衣装美を硬化させ，特に，キリスト教的思想による肉